



# 「脚下照顧」



## 『シスターと田中さんとのり君と沢尻エリカの関係』

先日、『第3回目の命のバトンタッチをする会』の記念大会に参加してまいりました。

250名を超える参加者の中で、それも今回は教会という特殊な場所で、緊張でガチガチになりながら司会という大役をやらせていただきました。

この会はテクアの安全大会でも講演していただいた鈴木中人さんが主催する会で、鈴木さんが愛娘さんを小児がんでなくされたとき、その愛娘の景子ちゃんが自分の命の最後の最後までを精一杯一生懸命に生き抜いた姿を、何とか今の命を軽視した社会の中で伝えていけないかと立ち上げられた会で、我々も常に危険な作業に身をさらして、『安全=命』という概念を最も大切に会社を運営していることもあって、ずっと支援させていただいております。

今回は鈴木中人さんの講演のほかに、日本のマザー・テレサと称されるシスター高木慶子さんの公演がありました。シスターは小柄でご高齢でありながら、内側からあふれ出すエネルギーは会場のだれよりも凄く、存在感に圧倒されてしまいました。人間が輝くということは、チャンネルとかヴィトンとかで外見を飾りたてることで得られるのでは決してなく、自分の内側に信じるもの、尽くしているものがあって、その目には見えない支えがあってこそはじめて輝くことができるということをひしひしと感じさせていただきました。

そんなことを原稿に書いていた矢先に、内的エネルギーギンギンな二人組が事務所にやってきました。ドラゴンボールのスカウターで判定したなら15万サイヤ人くらい行ってそうな、深い内的な自信に満ち溢れた笑顔で登場してきました。

その二人組みとは小豆島100キロウォークから生還してきたばかりの田中さんとのり君でした。

小豆島100キロウォークは知る人ぞ知る地獄の100キロコースで、これを時間内に完歩した人は渥美半島100キロウォークが天国に感じられると云われている程のコースなのですが、二人はこれを見事に制限時間内に完歩し、『自分を自分で褒めてあげたい』って感じのキラキラとしたオーラを事務所いっぱい振りまいておりました。

人はみな、何かしらの不安や自信のなさやコンプレックスを抱えて生きていると言われてはいますが、この日の田中さんとのり君に関してはまったくそれは当てはまっていませんでした。内側から、ものごっつい支え棒が彼らを支えていて、まったくぶれることの無いいい表情をしていました。高木慶子さんに感じたエネルギーと同等のものを感じました。と同時に、このものごっつい支え棒を心の内側に打ち立てるのに、何度くじけそうになりながらそれでも立ち上がり100キロの道のりを二人で励ましあいながら歩いてきたのだらうと想像し深く感動しました。

世の若者はなるべく楽で、快適で、給料のたくさんもらえる会社を探して転職を繰り返し、さ迷い歩いておられますが、『自分探し』とは実は『自分を支えてくれるもの探し』のことで、それはいくら外を探しても見つからず、要領とか効率とか手軽な利益とかを手放して愚鈍な自分と向き合ってコツコツと人生を歩み始めたとき初めて少し手に入るようなものではないかと思えます。

先日、『べつにい〜』という言葉と不機嫌そうな態度で、世間を騒がせた女優がいましたが、外側を不機嫌そうに強がって武装することで、何とか弱い自分を守ろうとしている姿に幼さと共に痛々しさが漂っていました。外見だけを育て、自分を支えるものを内側に育てることなく芸能界という荒海に漕ぎ出してしまった痛手は彼女にとってかなり大きなものだったのではないかと思えます。しかしながら彼女がその自分の弱さと幼さをしっかりと見据え、受け入れ、新しい歩みをコツコツと始めたなら、きっと10年後は『極道の妻たち』の高島礼子のような存在感のある女優になるような気がします。

われわれも機械修理業で存在感のある会社を目指したいものです。

感謝 羽原篤史

